

こくぶなかにしいせき
国分中西遺跡

1. 所在地 綾歌郡国分寺町国分字中西
2. 調査主体 国分寺町教育委員会
3. 調査期間 平成16年1月11日
4. 調査面積 約12m²
5. 調査担当者 国分寺町教委 末澤直樹
6. 調査指導者 香川県教委文化行政課
松本和彦
7. 調査の原因 町道中西中原線道路改良工事
8. 調査結果の概要

調査に至る経緯は、町道の工事中に五輪塔水輪部と土師質土器壺・足釜、須恵器片、瓦片、陶磁器片が出土した。時期的には、古代、14~15世紀、19世紀後半、近代に属する。これらに伴い人頭大以下の碟も多量に出土したことから、中世墓の可能性を考慮し、工事の停止後、遺跡の発見届を提出し、県教委より遺跡の保護上必要な勧告を受け、工事立会を実施した。

調査の結果、溝状遺構を1条確認した。溝幅約1mを測り、埋土は拳大前後の碟を多く含む暗灰褐色粘質土となる。出土遺物には19世紀後半から近代の土器・陶磁器、瓦片を認める。対象地は里境に合致し、開削時期は不明であるが、里境に沿って開削された溝と評価できる。

9.まとめ

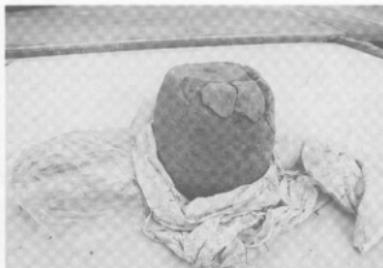
工事中に出土した五輪塔やそれに共伴する土器・陶磁器、人頭大以下の碟群の存在から、塚の存在に留意したが、塚の存在を首肯できる証左を得ることはできなかった。しかし、これらの出土遺物は、工事箇所付近にのみ認める径3mを上回る木根跡から出土したものであることが判明した。元来、極めて近接した位置に所在したであろう中世の塚の構成土が何らかの要因で木根痕跡に堆積し、溝深い等により今回検出した溝から近現代に属する遺物が混入し、工事中に確認されたものと理解できる。(松本)



第71図 遺跡の位置（「高松南部」）



第72図 調査区全景（南より）



第73図 出土した五輪塔

にしそえのりいせき
西末則遺跡

1. 所在地 綾南町北・綾上町末則
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成16年4月1日～
4. 平成17年3月31日
5. 調査面積 17,675m²
6. 調査担当者 香川県埋蔵文化財センター
北山健一郎・佐々木和裕・武井美和
歳本晋司・平尾勝洋・松井和久
7. 調査結果の概要

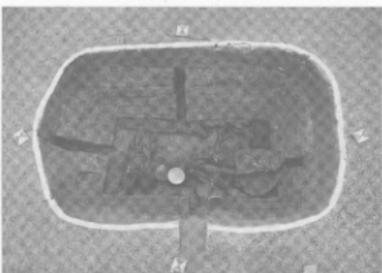
調査対象地は大きく東側のJ地区、西側のK地区、南側のC・E地区に分けられる。J地区では弥生時代の大規模な灌漑水路のほか、中世の屋敷地を検出している。屋敷地は溝により東西に分かれ、総数約40棟ほどの掘立柱建物跡を検出した。また、集落の北側では土壌墓も検出している。集落内からは県内産の土器類のほか、輸入陶磁器や石帶（巡方）などが出土し、有力な豪族の存在がうかがわれる。K地区では古代末期の掘立柱建物跡や井戸などを検出している。鍛冶炉と考えられる遺構もあり、注目される。西側では溝に囲まれた小規模な掘立柱建物跡があり、村落内信仰を示す施設と考えられる。南側のE地区では、弥生時代の大規模な自然河川と埋没後に形成された中世の集落を検出した。自然河川の東側の微高地上からは平安時代前期ごろと考えられる陶印が出土し、本遺跡の特異性を示している。

8.まとめ

西末則遺跡の発掘調査は今年度で4年度目となり、次年度にわざかに進入路部分の調査を残すのみとなった。調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけては東側の末則丘陵の裾部周辺に大規模な灌漑水路を設けていた集落の存在が確認された。奈良時代の集落は現在の北村用水の東側で確認された。平安時代後期から中世にかけては、北村用水の西側の半野部で検出したが、時期により所在が違うという古代～中世期の一種典型的な集落のあり方を示している。近世になると、建物の主軸方位が条里地割の方位から真北方向へと変化する様子がみてとれる。（北山）



第74図 遺跡の位置（「滝宮」）



第75図 J地区土壤墓（人骨出土状況）



第76図 K地区掘立柱建物跡（宗教施設）

ほんごう い せき 本郷遺跡

1. 所在地 高松市西山崎町1116-1外
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成17年2月1日～
3月31日
4. 調査面積 1,481m²
5. 調査担当者 香川県埋蔵文化財センター
森下英治・新谷政徳・中里伸明
6. 調査原因 県道円座香南線建設
7. 調査結果の概要

本郷遺跡は高松平野西部、堂山丘陵裾の平野に立地する。周辺には条里型地割を留めた水田が広がるが、調査地近辺は地割がやや乱れる場所にあたる。今年度調査は河道路跡をはじめ、縄文時代や古墳時代の溝跡を検出した。

縄文時代の河道路跡は黄色系砂質シルト層で埋没し、後晩期の土器片が少量出土する。幅10m以上、深さ2m以上をはかり、その最上部はマンガン粒が沈着する最終埋没砂層が認められる。そこから東北方向に派生する溝跡が取り付く。溝跡は幅40～50cm、深さ20cmの断面U字形の掘り形で、縄文土器片少量、焼土粒、炭化物粒、焼礫に加え、完形の石庖丁状石器が出土した。そのほか縄文時代土坑跡2基、柱穴跡約10基も検出した。弥生時代から古代の河道路跡は深さ約1.5mで、溝底付近で弥生時代後期初頭頃の土器片が出土した。その上部を覆う黒色粘質シルト層では古墳時代から奈良時代までの須恵器片が出土した。また、最上部層は人工的に堆みを埋めた堆積層である。

8.まとめ

昨年度確認された縄文後期の貯蔵穴跡に続き、縄文時代の居住遺構を確認した。柱穴跡や土坑跡は、窪地に隣接して数カ所にまとまっており、溝跡からは石庖丁状石器や焼土・焼け石などが出土していることから、河川埋没後の低地に接して集落が営まれたものと推定される。県内では縄文時代の居住遺構は希少であり、重要な資料となった。(森下)



第77図 遺跡の位置（「白峰山」）



第78図 縄文時代柱穴跡および溝跡



第79図 縄文時代の石鎌および石庖丁状石器

りつりんこうえん
栗林公園

1. 所在地 高松市栗林町1-20ほか
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成16年6月1日～
4. 調査面積 4,000m²
5. 調査担当者 香川県埋蔵文化財センター
　　北山健一郎・佐々木和裕・武井美和
6. 調査の原因 栗林公園東門周辺再整備事業
7. 調査結果の概要

調査対象地は動物園跡地約1万m²であり、予備調査の結果、遺構・遺物を検出した部分を中心に4,000m²の発掘調査を実施した。

調査区は南北に狹小なため、南からI～V区と呼称し、調査を実施した。I区では1間×3間以上の掘立柱建物跡を1棟検出した。

また、I区は江戸時代後期の「栗林分間図」に記載のある「萩御門」推定地であったが、門に関する遺構を検出することはできなかった。II区では大規模な瓦類の投棄土坑を検出した。III区では農業用の水を確保するためと考えられる出水跡を2基検出した。先行するものは素掘、後出するものは石組によるものである。IV区は「栗林分間図」にみられる屋敷地の推定範囲であり、北端部で礎石建物跡を検出した。

8.まとめ

今回の発掘調査では、近世の栗林山荘に直接関連する園池遺構などは検出できなかつたが、これは「栗林分間図」に近世末期の調査対象地が、北側に屋敷地、南側が藪・畑と記載があることと大きく矛盾しない。南端のI区およびIV区の北端で検出した建物跡は「栗林分間図」に記載のある建物跡と検出位置がほぼ一致することから、近世末期のものである可能性が高い。また、III区で検出した素掘の出水跡は18世紀後半、石組の出水跡は19世紀代のものと考えられる。遺構そのものは「栗林分間図」には記載されていないが、動物園跡地が近世には、栗林山荘を維持・管理する施設であったことがうかがわれる。このような例は他の大名庭園ではあまり見られず、藩主の生活の場と離れていることがその要因であると考えられる。(北山)



第80図 遺跡の位置（「高松南部」）



第81図 I区掘立柱建物跡（北より）



第82図 III区石組出水跡（北東より）

ひぐらし まつばやし いせき
日暮・松林遺跡

1. 所在地 高松市多肥上町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成16年6月23日～
4. 調査面積 1,500m²
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 特別養護老人ホーム建設
7. 調査結果の概要

調査地は、平成13年度において病院建設に伴い実施した日暮・松林遺跡の南側に隣接する。

発掘調査では主に弥生中期から近世までの遺構・遺物を検出した。弥生中期の遺物は多量に出土しているが、明確に時期の判明する遺構は不明である。周辺の調査事例から、調査区内で5棟検出した掘立柱建物跡が、当該期の遺構と考えられる。弥生終末期の遺物も多いが、遺構としては調査区中央部で土坑群を検出したにすぎない。古墳時代から古代の遺構としては溝を多数検出した。特にSD1は幅4m、深さ1.5mの規模で、多量の遺物が出土した。出土遺物中には長さ3.2mを測る木柵も見られた。またSD1に並行して中世まで多数の溝が掘削されていた。なお、これらの溝の埋没後も微高地となっており、その埋没は中世まで下る。近世では溝と土坑を検出した。

8.まとめ

周辺では、これまでにSD1とほぼ同規模の都市計画道路調査地SR02と病院調査地SD1が確認されていた。都市計画道路調査地SR02は下層から須恵器が出土しているのに対し、病院調査地SD1は下層から弥生時代の遺物しか出土しないことから、溝が連続しない可能性もあった。今回調査のSD1は両溝の中間地点にあたり、これにより、すべてが連続する溝であることが推測できる。また、下層から須恵器が出土していることから、古墳時代中期末～後期頃の遺構であることが判明した。なお、同一溝においても南側ほど須恵器の出土量が多いことから、調査地南側の微高地上に古墳時代の集落域が想定される。(大嶋)



第84図 調査区全景



第83図 遺跡の位置（「高松南部」）



第85図 SD01完掘状況

ひぐらし まつばやし いせき 日暮・松林遺跡

1. 所在地 高松市多肥上町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成16年12月1日～
平成17年1月7日
4. 調査面積 約750m²
5. 調査担当者 小川 賢・末光甲正
6. 調査の原因 フィットネスクラブ建設
7. 調査結果の概要

調査地点は、周辺部での調査結果により、弥生時代終末期を中心とした集落の縁辺部と推定されている。調査結果では、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構10条、土坑1基、性格不明遺構1基の他、ピットが散在して検出された。調査地の北部では、低地となる北東隅で大溝SD01等、等高線に沿って溝跡が数条認められたが、全体的には湿地状の堆積層に覆われ、遺構・遺物とも希薄であった。南部では次第に微高地となっていき、南西端部において掘立柱建物跡SB01や遺物を一定量含む溝跡SD07が認められる。SD07については調査範囲内においてその全容を明らかにできなかったが、弧を描いて認められることや出土遺物から、その内側に弥生時代終末期の住居等が存在していたものと想定される。また当遺構からは、赤色顔料によって口縁部を装飾していたと考えられる吉備系土器が出土している。

8.まとめ

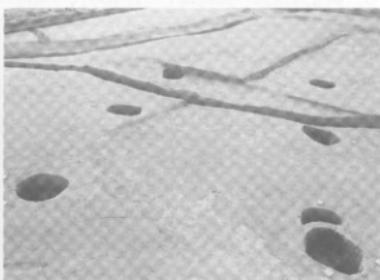
当地周辺部はこれまでの調査成果により、広範囲に亘って遺跡の全容が明らかとなりつつあるが、当地点においては弥生時代終末期の集落域に該当しており、その中心は調査地の南西にある日暮・松林遺跡に求めることができる。この他の時期については遺構・遺物とも皆無に等しい状況であることから、集落の中心から外れた位置関係に相当するものと考えられる。(小川)



第86図 遺跡の位置 (「高松南部」)



第87図 SD07 (西方向から)



第88図 SB01 (東方向から)

まつばやし いせき
松林遺跡

1. 所在地 高松市多肥上町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成16年4月1日～

4月12日

4. 調査面積 800m²
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 宅地造成
7. 調査結果の概要

調査地は、平成7年度において通学路建設に伴い実施した松林遺跡の南側に隣接する。

発掘調査では主に弥生中期・古墳時代～奈良時代、近世の3時期の遺構を検出した。弥生中期の遺構としては土坑・柱穴等を検出した。遺構は調査地の北東端に偏っており、調査地北東端が弥生中期の集落域の南限と考えられる。また、時期は不明であるが、噴礫を検出しておらず、平成7年度調査地で検出した弥生中期中葉の噴礫と同時期の可能性が考えられる。弥生中期の集落域以外の部分では溝を24条検出した。このうち弥生終末期の遺物しか含まないものもあるが、古墳時代～奈良時代の溝においても出土遺物の大半が弥生終末期の遺物であることから、確実な弥生終末期の遺構とは断定しにくい。古墳時代～奈良時代の溝のうちSD17は、南側の（財）香川県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した多肥松林遺跡（都市計画道路）I区SD03から続くものと考えられ、さらに松林遺跡（通学路）SD201に続くと考えられる。また、これらの溝群の埋没後の掘立柱建物跡を2棟検出している。掘立柱建物跡は条里地割に合致していることから、奈良時代以降のものと考えられるが、出土遺物は無く時期は不明である。条里溝としては、香川郡1条と2条の条界にあたるSD5が検出されているが、出土遺物から19世紀以降のものと考えられる。

8.まとめ

調査は細長いトレンチ調査となったため、遺跡の全体像や検出された水路の方向など不明な点があるが、弥生中期の集落域の南限を特定できた。（大嶋）



第89図 遺跡の位置（「高松南部」）



第90図 SD17 完掘状況



第91図 噴礫断面

たひみやじりいせき 多肥宮尻遺跡

1. 所在地 高松市多肥上町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成16年7月5日～16日
4. 調査面積 205m²
5. 調査担当者 小川 賢・末光甲正
6. 調査の原因 宅地造成
7. 調査結果の概要

調査対象地の西側には日暮・松林遺跡、南側には多肥宮尻遺跡(県埋文センター調査分)が存在することから、宅地造成予定地のうち街路部分について試掘調査を実施した。その結果、調査対象地中央付近で弥生時代前期の遺構等を確認し、本調査を実施することになった。

地表下約25～40cmで地山である黄褐色極細砂～明黃褐色粘土層に達し、この地山を切り込む形で、掘立柱建物跡1棟(柱穴3基)、溝4条を検出した。このうちSD01～03とした溝は、旧地形に沿って南西から北東へ向かっており、SD01が幅約4.6m、SD02が幅約4.0m、SD03が幅約0.8mの規模である。SD02・03については、下層から出土した土器より弥生時代前中期～中期初頭の時期が想定でき、SD01については同じ時期にまで遡る可能性があるが断定はできない。掘立柱建物跡と溝SD04については、出土遺物がなく時期不明である。また、調査地東側のわずかに窪んだ低地から、弥生時代後期の土器が出土している。

8.まとめ

今回の調査では、弥生時代前中期～中期初頭の溝数条を確認した。本遺跡より東に約80m離れた第2次弘福領田図調査F区でも同時期の溝を確認しており、関連が想定できる。両者の間にはわずかに窪んだ低地が存在することから集落の環濠とは考えられず、現時点では本遺跡で確認した溝は灌漑用水路の可能性を指摘しておきたい。(川畠)



第92図 遺跡の位置（「高松南部」）



第93図 西側調査区SD01全景（南西から）



第94図 東側調査区全景（東から）

たかまつじょうあと うちまちちく 高松城跡 (内町地区)

1. 所在地 高松市内町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成17年2月21日～5月12日
4. 調査面積 約550m²
5. 調査担当者 小川 賢・中西克也・末光甲正
6. 調査の原因 立体駐車場建設
7. 調査結果の概要

調査地は、往時の常盤橋から城内に入る大手筋に隣接し、絵図等から生駒期に「浅田岡書」「生駒左衛門佐(?)」、松平初期には「間嶋半右衛門」「松田庄左衛門」の屋敷地に相当している。また、享保年間の絵図においては御用屋敷、その後の絵図では「厩」として描かれる地点である。今回の調査では、17世紀後半頃に廃棄された大型の井戸を検出したことが大きな成果となった。井戸は東西約4m、南北5.9mの長方形になつており、最大で高さ1.6mの石積が認められる。またこの石積には○十と生駒の家紋である波引車紋を刻む刻印石がある他、井戸の南側では付属する水場遺構も検出されている。この他に、近世では井戸跡、石組溝、墓とみられる石積施設等の遺構が検出された。一方、中世以前では遺存状態が不良であったが、溝跡、柱穴痕等の生活痕が認められた他、大型井戸の水源でもある旧河道の存在もうかがうことができる。

8.まとめ

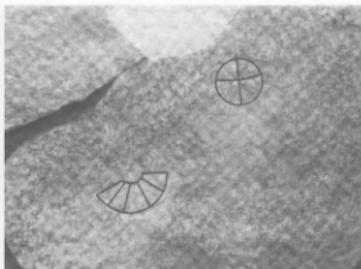
今回確認した大型井戸は、刻印石や井戸内に廃棄された木簡等から生駒～松平時代初期に使用されていたと考えられるが、幕末期の「東讃高松絵図」(弘化年間)において該当する地点に「井戸址」との記載があることから、廃棄後においても井戸址として認識されていたものと考えられる。(小川)



第95図 遺跡の位置 (高松北部)



第96図 大型井戸跡 (南から)



第97図 刻印石

し せきたかまつじょうあと くろがねもん
史跡高松城跡（鉄門）

1. 所在地 高松市玉藻町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成17年1月24日～
3月18日
4. 調査面積 62m²
5. 調査担当者 大鷗和則
6. 調査の原因 史跡整備
7. 調査結果の概要

調査地は、高松城跡の二ノ丸と三ノ丸の間に位置する。絵図によると、鉄門及びその北側に続く多門が描かれている部分である。平成15年10月25日に石垣の一部がき損したことから、16年度に解体を実施することに伴い調査を実施した。

石垣の上面調査では、表土層直下において

調査地のはば中央で検出した黄色粘土層を掘削したところ、東西2.3m、南北1.3m、深さ80cmを測る穴藏を検出した。穴藏は豊島石の切石を用いており、漆喰で目地を塞ぐ丁寧な仕上げである。遺物は建物解体時に投棄されたと考えられる瓦が多く出土した。なお、穴藏の築造年代については、掘り方が17世紀中葉の遺物が出土した石垣裏の盛土層を掘り込んでいたことから、17世紀中葉以降と考えられる。石垣上部の建物については、数箇所で礎石状の石を検出したにすぎず、建物の構造を解明するには至っていない。なお、石垣裏の栗石層中からは五輪塔30個体以上の他、石仏、石臼等も転用されていた。

裾部の調査では東西2箇所にトレーニチを設定した。西側裾部は現地盤で見えていた最下段の石が根石であることが判明し、根石の下部には胴木等は存在しなかった。一方、東側裾部は現地表面から約1.5m掘削を行ったが根石を検出するには至らなかった。

8.まとめ

鉄門は「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」にも「門」の記載が見られることから、築城当初から存在した門である。石垣の盛土層中から17世紀中葉の遺物が出土したことから、少なくとも1回は改修が行われたことが判明した。（大鷗）



第98図 遺跡の位置（「高松北部」）



第99図 上面調査地全景



第100図 穴藏完掘状況

し せきてんねん き ねんぶつ や しま や しまの きあと
史跡天然記念物屋島 (屋嶋城跡)

1. 所在地 高松市屋島東町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成16年10月4日～平成17年3月29日
4. 調査面積 約110m²
5. 調査担当者 山元敏裕
6. 調査の原因 史跡天然記念物屋島に所在する遺跡の把握
7. 調査結果の概要

平成16年度は屋島寺山門西側谷部に所在する南水門想定地の確認調査を実施した。

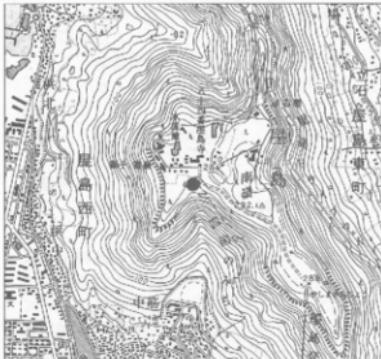
調査前は、標高275～276m付近に平坦地が存在すること、谷部で水の集まりやすい状況であることから、小規模な貯水池の存在が想定された。このほか、山上部の緩斜面から急斜面への傾斜変換点には、幅2mの帶状平坦地が谷を挟み東西へ伸び、傾斜変換点から4m程下がった谷中心部には石積みが認められた。これらの遺構の状況を確認するためトレンチを設定し、確認調査を実施した。

8まとめ

確認調査の結果、小規模な貯水池を想定した部分では、細かな単位の堆積が認められたものの、傾斜変換点に土手状の構築は認められず、貯水池の可能性は低いものと考えられる。

内托土段と考えられる部分に入れたトレンチのうち、西側では地表下40～50cmで岩盤に到達した。堆積土には安山岩の塊石が多く認められ、部分的には奥行3m程が平坦になる部分もみられる。東側トレンチでは地表下約1mで岩盤に到達する。山側上部の厚い堆積土は埋土中より近世頃の染付が出土したことから、後世の造成によるものと考えられる。

谷中央部で認められていた石積みは、調査の結果、標高267～268m付近の岩盤を、東西約7m、奥行約2mの範囲で山側へ削り込み、平坦化した後、平坦面の最も南寄りに石を据え、裏込めには安山岩の塊石を充填している状況が確認できた。確認調査の状況から小規模ながら、水が流れる谷部を中心人工的な石積みを造っていることが判明した。(山元)



第101図 遺跡の位置 (「高松北部」)



第102図 南水門石積 検出状況



第103図 第1トレンチ岩盤 検出状況

はくさん いせき 白山4、5、6遺跡

1. 所在地 三木町大字下高岡字
白山2703外
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成16年10月1日～
12月21日
4. 調査面積 304.65m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会
石井健一
6. 調査の原因 白山景観整備事業
7. 調査結果の概要

今回の調査対象地は、白山1遺跡の上方にあたる白山西斜面部の中位から下位にかけての範囲である。丘陵部と谷部の地形によって9調査区に分け、各調査区ごとに等高線に直交のトレンチを幅50cmで設定した。調査は人力掘削を行い、谷部で土量が見込まれる箇所のみ重機を使用した。また、遺構が検出された箇所については、トレンチを広げ、その包蔵状況を確認することとした。調査の結果、調査対象地の北端の丘陵と谷部斜面上に設定した1調査区、対象地のほぼ中央の丘陵から谷部にかけて設定した2、3調査区、対象地の南端の斜面上に設定した8、9調査区の3地区において弥生時代中期末から後期初頭にかけての竪穴住居や土壙等の遺構と弥生土器が多く検出した。また、他に設定した調査区については、遺物は検出するものの遺構については確認できなかった。

8.まとめ

白山遺跡群は、白山西麓の「六区袈裟櫛文銅鐸」が出土した白山1遺跡、石礫及び中世土器の散布地である山頂部の白山2遺跡、また、白山南麓の尾根稜線部及び急、緩斜面部を集落域とする白山3遺跡からなる高地性集落として知られている。今回の調査により白山の西斜面部の中位から下位についても集落域が拡がっていることが確認された。竪穴住居等の遺構は、尾根平坦部や南斜面部など3ヶ所に点在することが確認され、同遺跡群の構造や変遷を考える上で重要な知見になるものと考えられる。

以上のことから、遺構等が存在した範囲については、現状保存による保護措置を図ることとしたが、本事業の防災工事が予定されている箇所については、次年度で事前調査を実施する予定である。(石井)



第104図 遺跡の位置（「態度」）



第105図 3調査区 4トレンチ



第106図 9調査区 2トレンチ

うべやまこふん 鶴の部山古墳

1. 所在地 さぬき市津田町鶴羽1483-1
2. 調査主体 さぬき市教育委員会
3. 調査期間 平成16年9月27日～
12月24日
4. 調査面積 約72m²
5. 調査担当者 大川広城行政組合
松田朝由
6. 調査の原因 確認調査
7. 調査結果の概要

古墳は鶴部山の南側尾根上に位置する積石塚の前方後円墳である。平成元年2月に墳丘測量調査が行われている。今回は墳丘の範囲確認を目的として、計5つのトレンチを設定した。

調査の結果は、1・3・5トレンチにおいて地表面で観察される墳裾からさらに下位の傾斜面で地山上に石材を葺いた「外周段築」を検出した。「外周段築」は前方部ではなく、後円部のみを取り巻くように周っており、後円部を視覚的に大きく見せようとする意図が窺える。トレンチ2では後円部裾の石列が弧をなして配されていた。くびれ部付近では石列の中に大ぶりの石材が検出されたが、弧を描く石列がここを境として見られなくなることから、後円部と前方部の境に相当することが判明した。遺物は古墳に供献されたものと断定できるものではなく、すべて細片で煤の付着したものもある。また、石積の中からの出土もあり、今回出土した遺物の多くは古墳築造以前である可能性が大きい。ただ、時期的にはおおよそ古墳時代前期初頭が想定され、從来指摘されていた鶴の部山古墳の年代にはほぼ当てはまるところから、遺物の性格については今後の課題である。

8. まとめ

今回確認した「外周段築」により、古墳の範囲は從来の指摘から若干広がることになった。また、「外周段築」は高松市鶴尾神社4号墳など他の讃岐の積石塚にも認められる特徴であり、畿内的な性格が指摘されている津田湾古墳群において、その初源期である鶴の部山古墳は在地的な要素が指摘できる。(松田)



第107図 遺跡の位置（「讃岐津田」）



第108図 外周段築



第109図 後円部石列

おおぐしいしきりばあと
大串石切場跡

1. 所在地 さぬき市小田字松ヶ谷
2671-92
2. 調査主体 さぬき市教育委員会
3. 調査期間 平成17年2月8日～10日
4. 調査面積 約4000m²
5. 調査担当者 大川広域行政組合
松田朝由
6. 調査の原因 確認調査
7. 調査結果の概要

大串半島先端の東側斜面の「白粉谷」と呼ばれている谷部に石切場跡はある。「建武回録記」に鶴部荘から京都石清水八幡宮に石材の運ばれた記載があるが、当時鶴部荘であった大串石切場跡はその石材を切出していた石切場の候補地である。

調査は谷部北半分の測量調査を行った。石切場は上段と下段の2段からなる。上段は長方形の石材を連続して採石しており、石切造構は階段状に展開する。壁面には細長の工具痕が残り、壁面の前面には作業場と考えられる平坦地があり、周囲には転石が散乱している。石切造構のやや上位では幅約2.5mの「コ」の字状に採石された箇所が複数あり、材質を確認した試掘坑の可能性が考えられる。

下段は製作途中で中止された五輪塔火輪が壁面に残っており、中世石造物の石切場であったことと、石壁から直接製品形を採り出していたことが指摘できる。壁面の前面には上段と同様に作業場と考えられる平坦地があり、周囲には転石が散乱している。

谷底には採石された石材を降ろした通路の存在が推察されるが、地表面からは確認できなかった。

8.まとめ

石切造構は上段と下段で大きく採石方法、採石対象物、石壁に残された工具痕が異なっており、目的とする石造物や採石時期の異なる可能性が指摘できる。(松田)



第110図 遺跡の位置（「五剣山」）



第111図 上段石切造構



第112図 下段石切造構

おおいにしあいせき 大井西遺跡

1. 所在地 さぬき市大川町富田西
2. 調査主体 さぬき市教育委員会
3. 調査期間 平成16年4月1日～

6月4日

4. 調査面積 約2,000m²
5. 調査担当者 大川広域行政組合
阿河銳二・松田朝由
6. 調査の原因 民間土採取事業
7. 調査結果の概要

平成15年度に引き続き調査を行った。遺跡は兩滝山塊の西側に広がるなだらかな丘陵上に位置する。今年度は竪穴住居跡4棟、土壙墓1基、段状遺構4基、陥穴状遺構1基を検出した。

竪穴住居跡は尾根稜線上から若干下がった地点に4棟みられる。平面形は円形で直径6～7mを測る。4棟全てに住居内中央で土坑が2基並んだ「10型中央土坑」がみられ、北側が円形で深く、南側は長楕円形で浅くなっている。

土壙墓は西側尾根傾斜面で検出された。1.9×0.54mの長楕円形を呈する。南側長軸隅の床面で鉄剣と刀子を検出している。

段状遺構は尾根傾斜面にあり、東側斜面で3基、西側斜面で3棟を検出した。柱穴や溝をもつ例がある。陥穴状遺構は1.5×0.6mの長楕円形で床面中央にピットがみられる。

出土遺物は弥生式土器や石礫、鉄製品がある。弥生式土器は多くが平底である。器種構成としては高坏が一定量みられる一方小型品が少ない。以上から弥生時代後期中頃の時期が指摘される。

8.まとめ

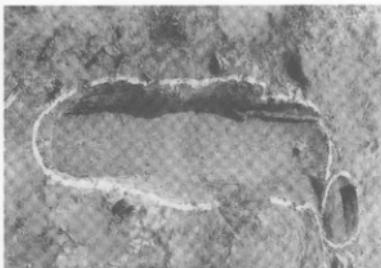
今回の調査では丘陵上に立地する弥生時代後期中頃の集落の様子が判明した。尾根上には昨年検出した台状墓があり、今年度は鉄剣、刀子を副葬した土壙墓を確認している。墓の築造年代は時期の断定できる資料に乏しく、墓と住居が同時並存するのか、時期が異なるかは現段階では判断できない。整理作業の課題としたい。(松田)



第113図 遺跡の位置（「志度」）



第114図 竪穴住居 全景



第115図 土壙墓 全景

ひけたじょうあと
引田城跡

1. 所在地 東かがわ市引田川向
2. 調査主体 香川県教育委員会
3. 調査期間 平成16年9月16~21日
4. 調査面積 48m²
5. 調査担当者 香川県教育委員会文化行政課
山下平重、松本和彦
6. 調査の原因瀬戸内海国立公園城山園地工事
7. 調査結果の概要
引田城は、戦後時代～江戸時代初期の山城で、7つの曲輪をもち、織豊勢力の技法のもとに石垣を築いたといわれている。

香川県環境・水政策課自然保護室が、遊歩道の設置に際して曲輪の一部を壊したため、工事箇所3か所について、発掘調査を実施することになった。

調査地1は、池田誠氏の図面（以下同じ）の曲輪Ⅷの西側の小曲輪の部分である。地層は薄い表土層の下に、平坦部では厚さ20cm程度の黄灰色細砂層がみられるが、傾斜地では表土直下基盤層の花崗岩ばいらん土になる。遺構は、検出されなかったが、瓦片5点出土した。

調査地2は、曲輪Ⅷの東北隅の部分で、虎口の想定場所のすぐ東側である。曲輪平坦面の端が調査地に含まれる。薄い表土下に、最大厚さ55cmの濁黃褐色砂質土があり、造成土とも考えられるが、遺構が検出されなかつたため、不明である。基盤層は花崗岩ばいらん土である。遺物は出土していない。

調査地3は、曲輪ⅡとⅠの境界の傾斜地である。土層は、薄い表土下、厚さ20cm程度の濁黃灰色粘質土で、基盤層は花崗岩ばいらん土である。石の抜き取り穴が検出され、穴の大きさ等から判断して、調査地の近くに置かれていた石がもともと埋まっていたものと考えられる。そのうち一番上にあったとされる2石については、周囲に残る石と並ぶような位置にあるため、もともとは石垣を形成していた可能性がある。遺物は出土していない。（山下）



第117図 調査地3



第116図 遺跡の位置（「引田」）



第118図 引田城跡縄張図

ひけたじょうあと 引田城跡

1. 所在地 東かがわ市引田城山国有林
2. 調査主体 東かがわ市教育委員会
3. 調査期間 平成16年10月1日～平成17年1月21日
4. 調査面積 約1,100m²
5. 調査担当者 大川広域行政組合

阿河銳二

6. 査の原因 遺跡内容確認

7. 調査結果の概要

市指定史跡である引田城址は中世以来の湊町である引田の町並みの北側にある通称城山と呼称される丘陵地に所在する。標高約86mを最高所とする馬蹄形状に延びる尾根とこれに挟まれた谷地形を中心に郭や遺構が展開している。戦国時代後半から元和元年の一国一城令までの間、湊町の防衛及び東讃支配の拠点的城郭として構築され、高さ8mをこえる

高石垣をもった總石垣の城郭として知られている。今回の調査は地形測量及びトレンチ調査で、①「東櫓」の一郭と、②谷地形上端の2ヶ所に調査区を設定した。①は天守台とされる郭の前面にあたる、60×20mの規模をもつた「馬つなぎ」と俗称される郭内に位置する。各トレンチより建物礎石・礎床基壇や石垣などが検出された。礎床基壇とするものは郭入口に近接するもので、南北約11m・東西約13mの範囲に高さ25cmほどの高まりが認められる。小砾が地表面を覆い、僅かに一抱え以上の石材が列状にも並ぶものである。遺物は多量の瓦が出土している。平瓦がその大半を占めるが軒先瓦も少量出土しており、礎床基壇トレンチからは鰐瓦が出土している。②は高石垣の北櫓の背面に位置するもので搦手にあたる。調査区は傾斜面と平坦地が交互に見られる、上端は石垣をもった摺台によって構成された虎口となっており、下方は両方の尾根を繋ぐ上面幅約2m・長さ約10m・高さ3m以上を測る土堤が構築されている。

8. まとめ

今回は上面までの検出に留めたもので全体的な各遺構の位置付けについては至らないが、具体的に城郭の内容について知ることができるとともに、露出している以外にも城郭を構成する石垣や礎石などが残していることを示唆するものである。また軒平瓦には生駒期高松城と近似するものがあり、生駒統治期に現在の威容が形成されたものとおもわれる。(阿河)



第119図 遺跡の位置（引田）



第120図 磚床基壇 調査状況



第121図 虎口 調査状況

III 平成16年度香川県埋蔵文化財センター発掘調査状況

1. はじめに

平成16年4月から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの廃止に伴い、県立の香川県埋蔵文化財センターが、これまで財団法人が実施してきた埋蔵文化財の発掘調査業務を担当することとなった。またセンターには課制をとることとなり、総務課と発掘を担当する調査課と報告書の作成および普及啓発を担当する資料普及課が設けられた。またこれまでセンターが実施してきた発掘調査は大規模発掘調査に対応することを目的として組み立ててきたが、大規模開発が減少する傾向が予測され、これまで文化行政課の文化財グループが実施していた小規模な発掘調査も対応可能なように小規模班を設置することとなった。今年度の小規模発掘調査は県道および県管理国道の整備に伴う発掘調査を実施し、その後整理作業を行った。また財団での調査が県教委からの委託事業であったものが、県立の組織として調査を実施するため、県予算の節別執行となり、より見通しを持って調査を組み立てる必要が生じた。県事業に関しては職員人件費の県費措置などによって生じる県立化のメリットを生かした効率的な調査方法を築いていく必要がある。

今年度は発掘調査体制については通常規模5班と小規模1班で調査を実施した。

(1) 国事業に伴う発掘調査事業

平成16年度の国事業としては、13年度から実施している普通寺病院改修に伴う普通寺市仙遊町に所在する旧練兵場遺跡と普通寺バイパス建設に伴う普通寺市生野町生野原遺跡の調査がある。

旧練兵場遺跡の発掘調査は、今年度から委託者がこれまでの国立普通寺病院が機構改革で独立行政法人国立病院機構普通寺病院となった。またこれまで厚生省四国厚生支局が発掘調査のとりまとめを行っていたが直接普通寺病院が窓口となった。4月から翌年3月までの通年で2班が調査に当たった。

旧練兵場遺跡の発掘調査対象地は、普通寺病院の敷地内であり既存建物や駐車場等の施設が対象地内に含まれ、機能廃止前の内容の確認が困難であることから当初の調査計画と実施で大きく想定が異なることが問題となっていた。また遺跡の遺構密度の異常な高さもあり、調査工程を事前に策定するのが非常に困難であることが、これまでの調査で課題であった。昨年度末、県教委文化行政課および四国厚生支局と協議を行い、旧練兵場遺跡発掘調査の実績の検討を行い、遺構密度毎の歩掛を作成し、遺構密度や遺構の残存度が明らかになった時点で工程調整を行う方法を探すこととなった。

今年度は発掘調査は暫定的に当初5,696m²を対象として予算化を行ったが、病院側の改修計画の変更および調査着手後の遺構残存度と遺構密度が明らかになったことに伴い3,547m²を対象として実施した。今年度で普通寺病院の改修に伴う旧練兵場遺跡の調査は一段落することとなった。今後、施設改修計画が具体化した時点で工事予定に含まれることになれば、再度協議をしていくこととなる。

今年度の調査は、昨年度の調査区の南側に位置し、これまで外來者用の駐車場として使用されていた場所である。地形的には西側を流れる弘田川の河川氾濫源がせまり、昨年度より旧地形は高くなることが明らかとなった。弥生時代中期の大型掘立柱建物やそれ以降の時期の堅穴住居群が密集することなど遺構密度的には変化はない。13年度以降の調査で弥生時代から古墳時代にかけて限定された範囲の中で繰り返し建て替えが行われ500棟ほどの堅穴住居が密集し、

遺物としても銅鐸片が出土するなど、丸亀平野西部の一大集落遺跡であることがより明確となつた。

国道319号バイパスの建設に伴う生野原遺跡の発掘調査は、10月から翌年1月までの4ヶ月間で実施した。古墳時代の竪穴住居の可能性がある遺構を検出した。この地域の開発史に新たな資料を得た。

遺跡名	調査面積	調査期間	遺構	遺物	担当者
旧練兵場遺跡	3,547m ²	平16.4～平17.3	竪穴住居、掘立柱建物、溝	弥生土器、石器、鐵器、青銅器（銅鐸）須恵器、土師器	片桐、信里、細川、福家、森（麻）、中嶋
生野原遺跡	2,317m ²	平16.10～平17.1	竪穴住居、溝、土師器	長井、新谷、宮武	

平成16年度 国事業関係発掘調査事業一覧

（2）県事業に伴う発掘調査事業概要

県道関係の埋蔵文化財発掘調査は、県道・県管理国道関係では、県土木部道路建設課の多度津丸亀線、円座香南線、国道438号関係、道路保全課の財田満濃線関係の4事業6遺跡の発掘調査を実施した。

多度津丸亀線では仲多度郡多度津町奥白方で奥白方南原遺跡・奥白方中落遺跡・中東遺跡の発掘調査を実施した。この内奥白方中落遺跡と中東遺跡が小規模班による調査である。

この2遺跡は当初合計6ヶ月の調査期間を予定していたが試掘後の遺跡内容の確定に伴い4月から7月までの4ヶ月の調査を実施した。奥白方中落遺跡では弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居群とともに平安時代初期の隆平永寶が6枚出土している。小規模な谷筋に立地する遺跡として注目される。奥白方南原遺跡は4月から9月までの期間で調査を実施し中世の土坑墓や掘立柱建物等を検出している。

財田満濃線関係では仲多度郡満濃町吉野に所在する大堀城跡の調査を10月から11月に実施し、鎌倉時代から南北朝にかけての居館遺構と考えられる規模の大きな柱穴を持つ掘立柱建物群を検出したが城館の堀等は調査区内には含まれないことが明らかとなった。

県管理国道の438号関係では東坂元三ノ池遺跡の発掘調査を実施した。これは昨年度末に調査予定であった対象地で家屋撤去が遅れた箇所で、今年度小規模班対応で実施したものである。

円座香南線関係では昨年度実施した本郷遺跡の続きを2月から3月で実施した。

県道・県管理国道以外の調査では、商工労働部観光振興課の栗林公園東門周辺整備事業と農政水産部農業経営課の香川県農業試験場移転整備事業の西末則遺跡の発掘調査を実施した。

高松市栗林町に所在する栗林公園は6月から11月にかけて実施した。対象地は大名庭園として特別名勝に指定されている庭園の中で維持管理部門が絵図に描かれている動物園跡地である。動物園獣舎等の基礎で遺構の残りが悪い箇所も存在したが、北部の東門周辺では礎石建物と板塀の基礎等を東部では土壘状の高まりが堀に沿って南北に走るなど栗林公園分間図に描かれた内容がほぼ同じ位置に存在するなどが明らかとなり、今後の整備に向けての貴重な資料が得られた。

綾歌郡綾南町北・綾上町山田下に所在する西末則遺跡の調査は予備調査を含めると平成12年

度からの継続事業で、今年度で大半の箇所が終了したこととなる。2班が担当し、途中1班は栗林公園の発掘調査を6ヶ月実施したため18ヶ月の調査となった。今年度の調査区では、13世紀代を中心とした集落跡の調査となった。対象地が面的に広い調査であり、掘立柱建物群と共に井戸跡・小鍛冶遺構・炭焼き窯・祠状建物跡・木棺墓等の当時の生活に関わる遺構の総体をほぼ確認することができ、中世の集落跡を明らかにする上で貴重な資料を得ることができた。

遺跡名	調査面積	調査期間	遺構	遺物	担当者
中東遺跡	355m ²	平16.4	弥生時代溝	土師器	森下、中里
奥白方中落遺跡	1,226m ²	平16.5～平16.7	弥生時代堅穴住居	弥生土器、隆平永賓	森下、中里
東坂元三ノ池遺跡	692m ²	平16.8～平16.9	中世掘立柱建物、溝	土師器	長井、宮武
大堀城跡	450m ²	平16.10～平16.11	中世掘立柱建物、溝	土師器、古銭	森下、中里
奥白方南原遺跡	1,226m ²	平16.4～平16.9	中世掘立柱建物、土坑墓、条里坪界溝	白磁碗、土師器	長井、新谷、宮武
本郷遺跡	1,400m ²	平17.2～平17.3	縄文時代溝、弥生時代自然河川、古墳時代溝	縄文土器、弥生土器、土師器	森下、新谷、中里
栗林公園	4,000m ²	平16.6～平16.11	近世礎石建物、掘立柱建物、板塀基礎	陶磁器、瓦	北山、佐々木、武井
西末則遺跡	17,675m ²	平15.4～平16.3	縄文時代石器製作跡、弥生時代後期出水状遺構、中世掘立柱建物、井戸	弥生土器、石器、須恵器、土師器	北山、藏本、松井、佐々木、武井、平尾

香川県埋蔵文化財調査年報

平成16年度

平成18年1月31日 発行

編集 香川県教育委員会事務局文化行政課

高松市天神前6-1

電話 (087) 831-1111

発行 香川県教育委員会

印刷 (株) 美巧社